

會 務

第 22 卷 第 5 號 昭和 11 年 5 月

役 員 會

臨時役員會 (昭 11.4.13)

昭和 11 年 3 月 23 日の役員會に於て選任せられたる下記役員立會の下に増員常議員 6 名の選舉投票の開票を執行したり(結果は 4 月 20 日の常議員會へ報告の通り)。

辰馬副會長、宮長、小野、藤井各常議員、古川主事、佐藤主計。

第 1 回常議員會 (昭 11.4.20)

出席者：井上會長、辰馬副會長、河口、蒲、菊池、後藤(宇)、後藤(茂)、關、沼田、鶴田、萩原、平山、藤井、宮長、宮本、吉田各常議員、古川主事、佐藤主計、名井、青山兩前會長

1. 常議員選舉投票開票立會役員次の通り選任せり。

辰馬鎌藏君、宮長平作君、小野基樹君、藤井眞透君、古川淳三君、佐藤利恭君

2. 増員常議員 6 名選舉の結果を次の通り報告せり。

投票人員 635 名

當 選	562 票	宮 本 武 之 輔 君
同	533 票	關 信 雄 君
同	518 票	沼 田 政 矩 君
同	513 票	吉 田 直 君
同	512 票	後 藤 茂 君
同	500 票	立 花 次 郎 君

次 點 井上隆根君 (20 票)、金子源一郎君 (16 票)、高橋嘉一郎君 (16 票)、阿部美樹志君 (10 票)、岩崎富久君 (10 票)、内村三郎君 (10 票) 以下略す

3. 中山秀三郎君より 2500 円の寄附金を受領せり。

4. 賛助員に次の 2 名を推薦せり。

藤原銀次郎君 (王子製紙株式會社社長)

小 谷 清君 (株式會社間組社長)

5. 日本工學會評議員會及社員總會議事を報告せり。

6. 5 月開催の視察旅行次第報告せり。

7. 理事 6 名互選の結果次の通り選舉せられたり。

沼田政矩君、萩原俊一君、平山復二郎君、藤井眞透君、宮長平作君、宮本武之輔君

8. 日本工學會本會選出評議員任期満了に付次期評議員に眞田秀吉君を選任す。

9. 工學會大會講演集を發行し全會員に配布すこ

ととせり。

10. 明治以前日本土木史を岩波書店と販賣契約を締結することとし契約文は原案の通り決定せり。

11. クラフト君講演會及招待晚餐會を來る 4 月 30 日帝國鐵道協會に於て開催することとせり。

12. 土木關係行政機構改正其他に關する件は次の如く擔任部を定め調査研究の上常議員會に諮ることとせり。

(イ) 土木關係行政機構改正其他に關する調査：法制部、(ロ) 標準工事契約書の改正：調査部、(ハ) 會員相互規約の制定：法制部、(ニ) 鋼鉄橋梁設計及製作示方書の制定：調査部、(ホ) 連絡委員會の設置：東亞部、(ヘ) 調査委員會の設置：東亞部

13. 特許局公報(土木關係)と會誌を交換することとせり。

14. 入退會の件

金野賢爾君外 2 名を會員に、赤羽善雄君外 24 名を准員に、有田政行君外 11 名を學生員として入會を認め、安達武雄君外 135 名を學生員より准員に転格承認せり。

15. 規則第 23 條に依り各部の部長を次の如く會長より推薦せり。

總務部長 平山復二郎君、經理部長 萩原俊一君、編輯部長 藤井眞透君、調査部長 沼田政矩君、法制部長 宮長平作君、東亞部長 宮本武之輔君

第 1 回理事會 (昭 11.4.27)

出席者：井上會長、平井副會長、沼田、萩原、平山、藤井、宮長、宮本各理事

1. ボルトランドセメント同業會を賛助員とする件に就ては本會關西支部に照會し其回答を得て更に協議することとせり。

2. 丹那隧道工事誌(鐵道省編纂)を本會に於て發行の件は編輯部に於て適當なる案を作成し更に協議することとせり。

3. 現在の事務員は各部に専任配屬せず従來通りとして各部仕事を爲すこととし必要に応じて臨時に各部に職員を囑託することに申合せり。

4. 既設委員會の所屬は次の如くせり。

總務部：土木學會振興委員會其他各學協會に關する委員會關係

編輯部： 維新以前日本土木史編纂委員會

調査部： 土木学会用語調査会，關西地方風水害調査委員會，臺灣地方震災調査委員會，土木学会コンクリート調査委員會

法制部： 土木建築士法案調査委員會

5. 各部の委員會新設及委員銜依囑の件は各部長に於て案を作成し次回理事會に於て協議することとせり。

6. 常議員會より理事會に委任する事項を次回理事會にて協議し常議員會に諮ることとせり。

第 2 回理事會 (昭 11.5.1)

出席者： 井上會長，平井，辰馬兩副會長，沼田，萩原，平山，藤井，宮長，宮本各理事

1. 貴族院勅選議員の銜奏請方を政府に再度建議することに申合せり。

2. 6 月中に映畫會を開催することとし，その日時及映畫の選擇等は總務部長に一任せり。

3. 既設の各種委員會委員並に他學會に屬する委員會に關し次の通り申合せり。

(1) 維新以前日本土木史委員會幹事は古川淳三，佐藤利恭兩君に繼續依囑すること。

(2) コンクリート調査委員會委員中沼田政矩君，平山復二郎君，藤井眞透君，宮本武之輔君は理事に就任せられたるに依りその後任を沼田調査部長より大河戸委員長へ相談し依囑すること。

(3) 振興委員會第 2 部委員中宮本武之輔君は理事に就任し榎部保君は編輯委員に依囑することとしたるに依りその後任に青木楠男君，永田年君を依囑すること。

(4) 世界動力會議大堰堤國際委員會日本國內委員會本會選出幹事は古川淳三君主事退任に依りその後任に萩原俊一君を依囑すること。

(5) 日本工学会用語統一調査委員會，同博物館建設調査委員會，同セメント試験方法調査委員會，機械学会水量測定規格制定委員會へ委員會の経過を照會すること。

(6) 土木建築士法案調査委員會委員長より同調査に關し意見を聴くこと。

4. 常議員會より理事會に委任を受くる事項を次の如く申合せ常議員會に附議することとせり。

會誌其他刊行物の寄贈，講演講習見学視察旅行其他の會合開催，會員の入退會及転絡の承認，役員選舉投票の開票，建議又は諮問に對する回答但繼續反復すべき場合の處置。

5. 各部の會務遂行上差當り次の如き委員會設置を

常議員會に附議することに申合せり。

總務部： 土木技術者相互規約調査委員會

編輯部： 會誌編輯委員會

調査部： 鋼橋設計並に製作示方書調査委員會，請負工事標準契約書調査委員會

法制部： 土木行政機構改正調査委員會

東亞部： 連絡委員會，調査委員會

總務部記事

土木学会振興委員會第 2 部第 1 回委員會

(昭 11.5.6)

出席者： 辰馬副會長，阿曾沼，稻葉，金森，木幡，佐藤，鈴木，高橋，徳善，榎井，宮本，三浦，山下，青木，永田各委員

1. 辰馬副會長より振興委員會設置に關し挨拶あり次で委員長の選舉を行ひ全會一致にて古川淳三君を委員長に推すこととせり。

2. 宮本理事より昨年中に於ける振興委員會第 2 部會にて協議し役員會に提案したる事項並に實行又は實行しつゝある事項に就き縷々説明あり議事に移り次の件を理事會に進言することに申合せたり。

(1) 貴族院勅選議員銜奏請に關し急速に建議を爲すこと

(2) 土木行政機構改正に關する調査を急速に實施すること

第 68 回講演會 (昭 11.4.30)

會場： 帝國鐵道協會，來會者： 176 名

ニョーク・ハドソン及イースト・リバーに於ける「シールド」工法に就て，エル・アール・クラフト君の講演あり，講演終了後晚餐會を開く出席者 85 名

第 24 回視察旅行

視察場所： 宇佐美隧道工事，箱根自動車専用道路，熱海海岸埋立工事。參加者 31 名

昭和 11 年 5 月 10 日午前 11 時 40 分小田原驛前より自動車に便乗出發，仙石原に到り仙郷樓に於て晝食を爲し瀨ノ湖畔及十國峠の自動車専用道路を視察し網代に到着，午後 4 時より宇佐美隧道網代口工事を視察し午後 6 時熱海海岸埋立工事を視察して解散せり(會報記事参照)。

編輯部記事

第 5 回會誌編輯委員會 (昭 11.5.8)

出席者： 辰馬副會長，藤井編輯部長，板倉，稻葉，岡崎，大久保，加藤，嶋野，鈴木，野坂，廣瀬各委員 末森前委員

1. 第 22 卷第 4 號所載論說報告に對する討議依頼先を決定せり。

2. 第 22 卷第 4 號所載論說報告其の他に對する謝禮を決定せり。

3. 第 22 卷第 4, 5 號登載論文其の他を次の通り追加せり。

工事寫眞： 高山線坂上打保間雪崩事故(4 號)，全通せる指宿線(5 號)，全通せる姫津線(5 號)，竣功せる富山大橋，竣功せる草津川河底隧道

講演： 最近に於ける本邦土木事業の情勢(4 月 19 日ラジオ講演)會長 工，井上秀二(5 號)

抄 録： 都市煤煙の經濟的影響に就て(傍島)，スパン 1080 呎のクローム銅合金鋼アーチ(傍島)，コンクリート露臺の伸縮目地の作用に就て(傍島)，汚水處理に關する時事手記(竹内)，カルメツトの汚泥焼却機(萩島)，2 回嵩上げたコンクリート塊の漏水に就て(小林)，Milwaukee の下水處理設備の擴張(小林)，土壤の土木工學的の分類並に性質(米屋)，鋸屑に依るコンクリート鋪裝の發生(古河)(以上 5 號)

4. 第 22 卷第 6 號登載論文其の他を次の通り決定せり。

講演： ニューヨーク・ハドソン及イーストリバーに於けるシールド工法に就て(4 月 30 日講演)クラフト

論說報告： 大井川發電工事報告(會，後藤 茂)，乾燥砂並に濕潤砂の土質力學的研究(會，工博，小野謙兄，會，工，眞井耕象)

討議： 朝鮮慶尙南道赤布橋工事報告(准，工，中島武)，同上(著，准，角田孝志)，道路縱斷勾配の路面排水に及ぼす效果に就て(會，工，金子 純)，同上(著，會，工，工藤久夫)

彙報： 植物の生態學より見たる本邦河川の植物部落(理，猶原恭爾)，風速と波高との關係(會，工，松尾春雄)，線路改良工事の一新例としての五條川橋梁改築工事に就て(會，工，中原壽一郎)

抄録： 自旋吊橋(本城)，軌條の連続熔接(古賀)，汚泥及び分離水の取出に簡易なる消化槽配管(西村)，New Brunswick 下水處理場に用ひられたる藥品沈澱(西村)，シカゴに於ける鋪裝の發達に就て(古河)，上下水道用計量器としての主要諸器械(西村)，充腹拱の撓屈及び其の基本振動數(住友)，木製の水槽塔(住友)，

洪水の際取外し得る橋梁欄干(吉藤)，Yerba Buena 隧道(吉藤)，各種汚泥處分法の經濟的比較(松見)，硫酸銅の新注入方法(米屋)，ポーランド Gdynia 港の主要(比田)，リバプール港(比田)

特許紹介： 8 件及び實川登録新案

5. 抄録打合會を繼續設置する事とし野坂委員に之が擔當を依頼する事とせり。

第 37 回維新以前日本土木史編纂委員會

(昭 11.4.28)

出席者： 眞田副委員長，江澤，大河戸，小川，那波，眞島，茂庭，安藝，板井，赤木各委員，高柳，栗原，渡邊，小川，坂本各歸託

本月の編纂事務その他の報告をなし次の事項を協議せり。

1. 著作権者は會長名にすること，牧博士へ著作権に就き再交渉することとせり。

調査部記事

第 42 回用語調査會幹事會 (昭 11.4.15)

出席者： 中川幹事長，赤木，青木，五十嵐，内村，河口，菊池，久保，鮫島，田中，富永，中山，成瀬，沼田，萩原，藤井各幹事

1. 土木一般用語は特に部門として擧げるものなきを以て該部門を廢することとす。

2. 下記 4 分科部會を近日中に開催し各部門共通用語に就て審議することとす。

第一部會： 応用力學(山口)，橋梁及構造物(三浦，青木，沼田)，材料及施工法(藤井，中山)，鉄道(田中，沼田)軌道(佐藤)

第 2 部會： 水理(樞部)，河川(樞部，富永)，上水道(河口)，下水道(田中)，發電水力(菊池)

第 3 部會： 港灣(鮫島)，河川(樞部，富永)，土木機械(本間，川口)，砂防(赤木)，材料及施工法(藤井，中山)，發電水力(菊池)

第 4 部會： 下水道(田中)，都市計畫(榎木(櫻井))，材料及施工法(藤井，中山)，道路(永田)，鉄道(田中，沼田)，橋梁及構造物(三浦，青木，沼田)，土木機械(本間，川口)

3. 索引組方は見本通り活字は 6 ポイントとし 2 列組とす。

4. 用語集表裝はクロス上製とす。

5. 豫約募集方法及び定價に關して協議す。

6. 土木工学用語集收支概算並に序文に關しては委員長及び幹事長一任とす。

第 1 回臺灣地方震災調査委員會 (昭 11.4.23)

出席者： 草間委員長，後藤，高橋，藤井，三浦各委員
小野寺庶務主任，五十嵐編輯主任

1. 堀田特別委員長よりの調査報告に基き協議したる結果下記委員に於て適當に取纏め會誌に登載することとせり。

鐵道の部； 後藤委員， 鐵道以外の部； 高橋委員

2. 會誌に登載せる調査報告の別刷を特別委員長に送附することとせり。

○昭和 11 年 4 月 26 日土木學會誌第 23 卷第 4 號を發行成規の手續を了し 4 月 27 日全會員に配布せり。

○昭和 11 年 4 月 30 日午後 4 時 30 分より帝國鐵道協會に於て滿洲國國務院國道局長直木倫太郎君を主賓とせる東亞部事業に關する懇談會を開催し出席者井上會長，平井，辰馬兩副會長，宮本東亞部長其他理事，常議員及前會長等 20 餘名出席し意見の交換あり，滿洲國に於ける東亞部事業に關しては直木倫太郎君に於て御盡力を願ふこととし散會せり。

その他の記事

○昭和 11 年 4 月 25 日理事 6 名就任の登記を了せり。

入會及転格會員

(昭 11.4.20 手續了)

氏 名	勤 務 先	氏 名	勤 務 先	氏 名	勤 務 先
金 野 賢 彌君	富山縣電氣局土木課	丹羽 纈之輔君	鐵道省大臣官房研究所	松 原 平 八君	國道局新京建設事務所
赤 羽 善 雄君	福島縣廳地課	曾 根 高 恒君	日本電力株式會社	山 岸 正 應君	内務省東京土木出張所
石 川 政 一君	宇治川電氣會社	高 橋 重 雄君	"	山 下 秀 男君	堀内組
小 谷 金 馬君	株式會社岡組	丹 生 一 夫君	鬼怒川電力株式會社	山 科 三 郎君	日本電力株式會社
大 塚 滉君	京都帝大土木教室	羽 生 遙君	福井縣廳土木課	山 村 正 貞君	日本製鐵株式會社
河 北 正 治君	内務省新潟土木出張所	古 川 四 郎君	國道局新京建設事務所	吉 田 浩君	
小 島 三 夫君	新潟縣廳土木部河港課	松 野 久 吉君	宇治川電氣株式會社	米 田 達 雄君	根室築港事務所
五 明 寬 平君	新潟電力株式會社	丸 山 平 次郎君	滿鐵沙河河研究所	奥 山 操君	大同電力株式會社
鈴 木 弘君	新潟縣廳土木部河港課	安 田 保 男君	日本電力株式會社		
鈴 木 藤 次君	白石基礎工業株式會社	山 内 一 郎君	内務省東京土木出張所		
有 田 政 行君	九州帝大	會 員 (入 會)			
磯 部 憲君	名古屋高工	准 員 (入 會)			
植 木 貞 衛君	仙臺高工	多 胡 一 三君	武藏高工	神 代 方 雅君	仙臺高工
清 水 恒 男君	日大高工	谷 脇 謙君	北海道帝大	岡 村 治 男君	山梨高工
藤 原 銀 次郎君	王子製紙株式會社社長	山 本 憲 治君	徳島高工	三 井 芳 男君	日大高工
		梅 山 登君	東京高工	矢 野 繁 雄君	日大高工
		学 生 員			
		小 谷 清君	株式會社岡組社長		
		贊 助 員			
		准 員 (転 格)			
安 達 武 雄君	安 藤 良 助君	安 部 松 之 助君	赤 松 一 君	瀧 美 正 秋君	天 野 保 壽君
井 上 太 郎君	伊 藤 信 男君	池 上 武 男君	石 井 興 良君	石 尾 良 一君	石 川 一 三君

石村孝君	板橋一郎君	泉辰男君	稻穂義信君	宇野寅三君	上田健太郎君
上荷敬一君	内田芳夫君	小澤章三君	大串滿馬君	大塚清君	大塚邦一君
大橋正一君	大加鑿君	大森美忠君	岡田彰君	岡宮由太郎君	加茂金吾君
角田健一郎君	汾湯光君	河合秋一君	河合宏美君	河島正二君	神田祐太郎君
菅野一君	木下喜兵衛君	喜多見卓君	北浦勇君	久保正君	栗原二郎君
小林誠一君	小林長雄君	小林嘉道君	幸野弘道君	佐々木精一郎君	佐藤三男君
佐藤守榮君	齋藤明君	酒井英男君	設樂藤雄君	注連清君	篠崎偉一君
島井裕君	下山次郎君	新司延次郎君	鈴木佐雄君	關谷不二彦君	田中和美君
田中五郎君	田中彰一君	高井壽吉君	高橋進君	高松守君	竹内康和君
武市幸雄君	橋洋太郎君	千葉直之君	手島友之君	内藤一男君	中島正治君
中西清雄君	中西成城君	中野健治君	中村清照君	中村正君	中村吉光君
西本惣八君	彌津保丸君	野中久光君	野村正君	野元秀雄君	萩原精三君
白善武一君	橋谷田良平君	島山正君	濱田一太郎君	東正久君	平島博希君
平田寛君	平田正樹君	平野巖君	藤原正明君	二松慶彦君	堀合信男君
堀尾博通君	前島健雄君	增田正次君	松井宇太郎君	松尾剛君	松木正三君
三上恒君	三好宗逸君	三好忠君	水谷政夫君	宮崎誠三君	森山清君
諸橋運治君	矢坂仁四郎君	山田順治君	山田貞賢君	山田安綱君	横尾誠吾君
横須賀正君	吉井龍雄君	吉田好文君	米井正敏君	渡邊清藏君	片平信黄君
吉川吉三君	中島忠邦君	山内浩君	山田岩保君	田代信雄君	土橋宜夫君

土木學會々員數

(昭和11.4.20在現)

會 員	准 員	学 生 員	特 別 員	贊 助 員	合 計
2709	2650	513	2	20	5899

圖書及び雜誌

(昭和11年4月中)

交 換

水道協會雜誌	第35卷4月號	水道協會誌	骨組の力学	第3卷	コ ロ ナ 社
衛生工業協會誌	第10卷第3號	衛生工業協會	業務研究資料	第34卷第8-9號	鐵道大臣官房研究所
資 源	第6卷第4號	資 源 局	日本鑛業會誌	第52卷第612號	日本鑛業會
道路の改良	第18卷第4號	道路改良會	滿洲技術協會誌	第13卷第85號	滿洲技術協會
都市問題	第22卷第4號	東京市政調查會	日本建築士	第18卷第4號	日本建築士會
造船協會雜纂	第160號11年4月	造 船 協 會	工 政	191號11年4月	工 政 會
港 灣	第14卷第4號	港 灣 協 會	衛生工業協會誌	第10卷第4號	衛生工業協會
電氣學會雜誌	第56卷第4册第573號	電 氣 學 會	建築雜誌	第50輯第611號	建 築 學 會
工業化学雜誌	歐文別册第39卷第4號	工 業 化 學 會	土木試驗所報告	第33號昭和11年第1册	
建築と社會	第19輯第4號	日本建築協會			内務省土木試驗所
鉄 と 鋼	第22年第3號	日本鉄鋼協會	A Magyar Menok, es Epitesz Egylet Kozlonye		
會 報	第37卷第4號	帝 國 鉄 道 協 會	LXX, Kotet 11-14 szam.		
熔接協會誌	第6卷第2號	熔 接 協 會	Societa Ungh, Dezli Ingeneri ed Architetti.		

寄 贈

電氣特報 第3巻第2號 沖電氣株式會社
 学院同窓會誌 第38巻第4號 工学院同窓會
 業現勢 第5巻第4號 東京工業大学工業調査部
 市美 第14號11年3月 都市美協會
 割整理 第2巻第4號 土地區割整理研究會
 学 第260號4月號 東京工学社
 洲電氣協會報 第35號4月號 滿洲電氣協會
 關雜誌 第3巻第1號 日本造園學會
 メント界彙報 4月號第337號

日本ポルトランドセメント同業會
 邦工業化学研究業績概要 工業化学會
 古屋工業會報 第156號4月號 名古屋工業會
 報 第5巻第4號 東京工業大学
 物 第3巻第4號 日本鑄物協會
 メントコンクリート道路 第38號

日本ポルトランドセメント同業會
 学報告 第12巻第1號 東北帝國大学
 memoirs of the Ryojun College of Engineering
 Vol. 13, No. 7 旅順工科大学
 線資料 第1巻第1號 東京電氣無線株式會社
 木建築雜誌 第15巻第4號 シビル社
 3回特許局發明展覽會報告書 特許局
 菱電機 第12巻第3號 三菱電機株式會社
 道技術 第10巻第5號 鐵道技術社
 友 第34號11年3月 建友會
 立評論 第19巻第4號 日立評論社
 学院概覽 中華民國24年 國立中山大學工学院
 和10年に於ける特許費用新案意匠及商標の趨勢

特許局
 ールド工法に就いて昭和11年3月 白石多士良
 購 入

er Bauingenieur, April 1936, 17 Jahrgang Heft
 11-14.
 ston und Eisen, April 1936, 35 Jahrgang Helt
 6-7.
 e Bautechnik April 1936, 14 Jahrgang Heft. 12-

國立公園 第8巻第4號 國立公園協會
 工事畫報 第12巻第4號 工事畫報社
 岡崎市上水道小誌 岡崎市役所水道課
 Excavating Vol. 30, No. 3 三井物産機械部
 建築に現れたる日本精神(伊東忠太講演) 啓明會
 帝國學士院紀事 第12巻第3號 帝國學士院
 セメント微粉未測定共同試驗報告書

日本ポルトランドセメント業技術會
 エンジニア 第15巻第160號 都市工業社
 日本ニッケル時報 第4巻第2號 日本ニッケル時報局
 信 號 第9巻第2號 信 號 會
 水曜會誌 第8巻第10號 水曜會誌
 G. S news Vol. 10, No. 3. 日本電池株式會社
 東京土木建築業組合報 第9巻第4號

東京土木建築業組合
 セメント工業 第408號11年5月 セメント工業社
 滿洲建築雜誌 第16巻第4號 滿洲建築協會
 利 根 第2巻第4號 利根製作營業所
 動 力 第41號11年4月 日本動力協會
 會務彙報 第52號11年4月

日本土木建築請負業聯合會
 セメントコンクリート道路 第39號

日本ポルトランドセメント同業會
 The Journal of the institute of Electric Engineers
 of Japan Vol. 56, No. 1.

The Denki-Gakkwai
 神戸市内高架線史 阪神急行電鉄株式會社 上田 寧
 鐵道監督法規論 大山秀雄, 壺田修著 佐藤利 恭
 交通統制概論 井上篤太郎著 佐藤利 恭
 交通統制論 大槻信治著 佐藤利 恭

16.
 Engineering News-Record, March 1936, Vol. 116,
 No. 11-14.
 Le Genie Civil, Avril 1936, CVIII, No. 13-15.

會 員 内山祥一君昭和 11 年 5 月 2 日逝去せられたり本會は弔詞を靈前に呈し
 恭しく哀悼の意を表したり。

准 員 青山修君; 樋口仲夫君の訃報に接す。本會は恭しく哀悼の意を表す

會

報

第 22 卷 第 5 號 昭和 11 年 5 月

第 24 回視察見學旅行記事

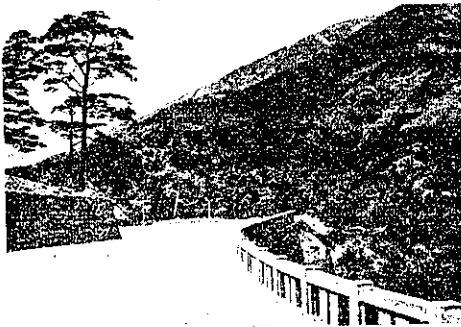
本會の視察旅行は日と共に益々隆盛を極め各會員の渴望的となつた。今回は 5 月 10 日を卜して小田原より若葉の薫る本那唯一の名勝地箱根各地温泉場を巡り、蘆ノ湖畔より十國峠を経て熱海を過ぎ網代に至り宇佐美隧道の工事視察の後懇親會場熱海迄終始高級自動車搭乗のドライブによつて決行された。

當日は清朗なる天候に恵まれ午前 10 時半頃より集合場所小田原驛前に各参加會員続々と詰めかけられ一行 40 餘名は 2 臺の自動車に分乗 11 時 40 分出發、完備した舗装道路を滑るが如く早川に沿つて馬ならぬ近代文明の利器はエンジンの快音につれて疾驅し始めた。

爽快なる新緑の香りに觸れ乍ら前面に双子山を眺めつゝ車は早くも湯本温泉場に達す、湯本は箱根群山の東麓早川須雲川の合流點に位し附近に北條氏の墳墓である金湯山早雲寺、玉簾ノ瀧、湯坂山の櫻など訪ふもの多き有名古蹟を偲びつゝ湯坂山と塔ノ峯との間早川の溪流に枕んでゐる塔ノ澤に至る、本湯は朱舜水が唐土の驪山の湯に勝ると賞したと云ふ名温泉場なるも浸るに暇なく坂路愈々急となり登山路ドライブの快感は本格的となる。

正午頃紅葉の名所として知られたる小湧谷方面への國道との分岐點宮ノ下に到る、當地は箱根諸温泉の中心地として地形稍平垣海拔 417 m の高所にあり峯巒の間より遙に相模灘の遠景が望まれ熊野神社のある淺間山へは絶好の散策地として知られる。

箱根登山道路



エンジンの調子益々順調にして優秀なる登山國道は車をして聊の疲れも見せず、腕曲を極むる登山ルートは風景の展開を恣にする。暫時にして蛇骨川の畔なる

底倉に至り附近にある吉野朝の忠臣新田義則の記念碑、豊太閤の石風呂の跡等の舊蹟を追憶しつゝ早川溪谷の底にある堂ヶ島温泉通過も東の間、明星ヶ嶽の雄姿を右に見つゝ溪流の勝に於ては箱根第一と稱せられる木賀温泉場も無事通過、左に早雲山右に明神ヶ嶽の峻峯を眺めつゝ麥転極りなき絶景を賞でつゝ宮城野もパス、ゴルフリンクで人口に膾炙した仙石原の曠野に臨み、小田原出發以來 20 km 往時難所とまで稱せられし箱根の險路も 1 時間足らずにして登り、零時半最初の豫定休憩場たる蘆ノ湖畔仙郷樓に到着、熱海建設

仙郷樓到着の會員の一部



事務所員諸氏の御出迎を受け、宇佐美隧道工事大要と題するパンフレットを配付され同事務所の御好意による晝餐の饗應に預り山海の珍味に一同は舌鼓を打つたのであつた。

熱海隧道工事主任石川九五氏は寸暇を利用して第二豫定視察場所宇佐美隧道工事の大要につき懇切なる説明をされた。

都塵を離れて山地の清澄なる空氣に觸れつゝ暫し憩ふこと又忘れ難き味を覚え、去りげなき氣持の内にも時の流れは刻々と次の行程へと迫る。1 時 50 分同樓

仙石原より芦ノ湖畔に差し掛りたる光景

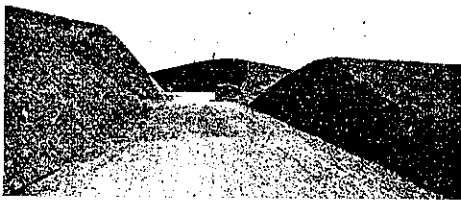


におさらばを告げた一行は再び車上の人となつた。

聖上陛下が攝政宮の御當時始めてゴルフの御稽古を遊ばされた由緒深い仙石原ゴルフリンクを右方に望み、同 2 時 5 分には神山、駒ヶ嶽の山腹に敷設された自動車専用道路（道路幅員は樂に自動車の行違ひ出来る程度、延長約 7km、この始終點には關所があつてバス 1 臺に付 2 円 50 錢の通行料を拂ふと門扉が開いて自動車が通れる様になる）に入り山姿迫り湖面には神祕をこめ幾多の傳説を残して居る蘆ノ湖を今では軽快な遊覽モーターボートが白浪をけたて走る蘆ノ湖を色々の角度から眺め乍ら、同 2 時 25 分専用道路終點を通り抜け元箱根町に差掛つた。

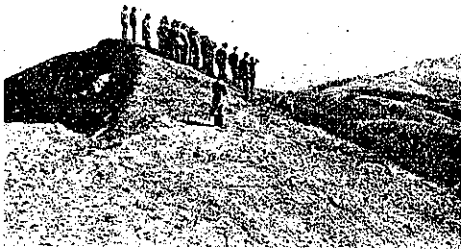
街道の兩側には鬱蒼とした畫向ほ暗き杉並木があり、時々並木の合間から蘆ノ湖面を望み乍ら往時の關所跡の記念碑などを車窓に望み箱根町を過ぎ間もなく同 2 時 37 分十國峠越への自動車専用道路（此處も蘆ノ湖畔専用道路と同じくバス 1 臺に付 2 円 50 錢の通行料金を徴收された）に入り同 2 時 55 分眺望第一

十國峠附近自動車道路の一部



の十國峠で一行は下車し田代盆地を眼下に見下し丹那盆地（この地下 525 呎の處に丹那隧道が通つて居る）を遠望し石川技師の御説明に依り彼の有名な丹那隧道工事を懐古し或は同盆地の湯水問題の現状を聞き

十國峠より丹那盆地を眺む一行



一行は車上の人となり再び舊進を続けると間もなく左方に相模灣右方に駿河灣が展開してゐて前方の小山の上には高く聳ゆる飛行燈臺が見え、身を十國峠の高きに置き空は澄み渡つた今日の下界の風光は日常都塵の中に身を置く吾々には身心の爽快を満喫するに充分であつた。

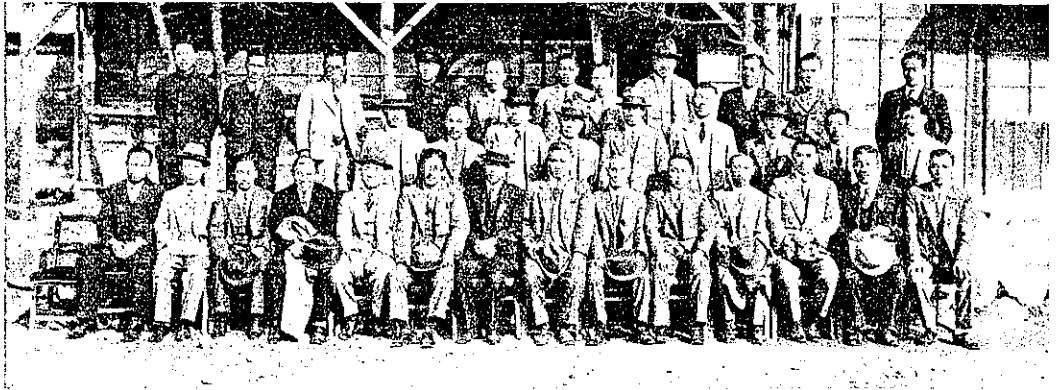
同 3 時 8 分には専用道路の終點熱海峠に至り初島、熱海町を目下に望み乍ら迂餘曲折の坂路を下り、同 3 時 30 分温泉都市熱海町に差し向つた。こゝでは温泉町の雑音の中からラヂオが好調子でショートゴロ、ショートゴロ、ショート取りマシター壘投球アウトを叫んでゐて一行は折角今迄培はれた原始的な大自然の雰圍氣をさまたされた一種の落膽を微苦笑で迎へた。間もなく熱海海岸に出て屈曲高低多き海岸線伊東街道を舊進し車窓に廣大海原の彼方に横たはる長い水平線を眺め乍ら、同 4 時網代驛に到着鉄道省熱海建設事務所の好意で一行の記念撮影をして一行のために特設された天幕内で眞新しい作業服、帽子、靴に身を固め 7 臺のトロリーに打乗り 1km 300m の坑奥へ進み親しく坑内作業状況を視察し、出坑に際し坑口にて再び一行の記念撮影をして洗顔後衣服を着替へ天幕内にて間組、静岡縣土木部よりの茶菓ビールの饗応に預つた、北澤淳夫氏は本會を代表して星野所長へ謝辭を述べられ、同 5 時 37 分同所を出發熱海へ逆行し途中下車して熱海埋立株式会社原田碧氏の御案内で埋立工事中の現場を視察し同 6 時 30 分温泉旅館聚樂に到着一行はドテラ姿となり一風呂浴びて晴々した気分となり海に面した大廣間で盛大な懇親會を催し、茲に本エキスカーシンは盛會裡に無事終了を告げた。

終りに臨み小田原出發以來終始御世話下さつた熱海建設事務所の星野所長、石川技師、稻石技師を始め各幹部の方々へ滿腔の感謝を捧ぐる次第である。

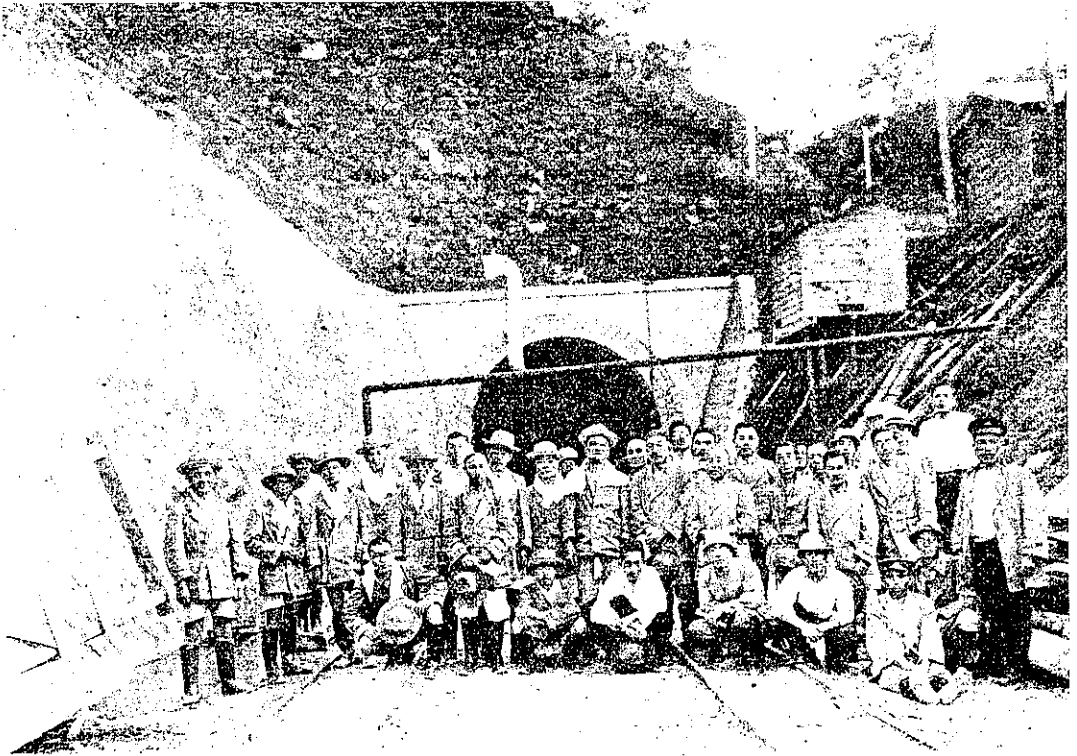
熱海伊東街道より初島を眺む



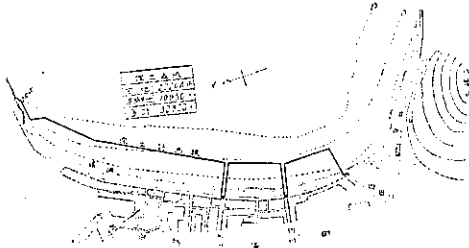
一行の記念寫眞



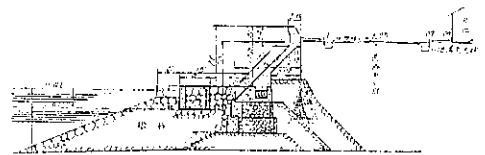
隧道視察を終へた一行の勇姿



熱海々岸埋立平面図



熱海々岸埋立海壁設計図



激浪の岸壁に打揚げたる光景



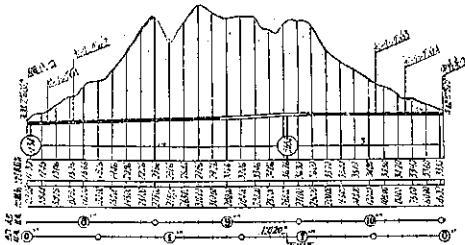
昭和 10 年 9 月 26 日 熱海を襲ひし激浪



宇佐美隧道工事大要

1. 隧道の位置及設計の概要 宇佐美隧道は伊東線網代驛宇佐美驛の間にあり、伊豆半島の一支出脈が相模灘に突出せる部分を南北に貫く延長 2km 920m の単線型隧道である。勾配は北口(網代側)より 1km 820m 間 14/1 000 の上りで残りの 1km 100m 間は南口(宇佐美側)に向つて 3/1 000 で下りの設計である。

図-1 宇佐美隧道縦断面



2. 地質 宇佐美隧道の通過する山体は第三紀層時代の準平原の基盤の上に火山噴出物たる集塊岩及熔岩流の累層せるものである。隧道は大体その基底たる第三紀層の岩石を通過するものゝ如く想像される。

ボーリング箇所	坑門よりの距離 (m)	施行基面より地表迄の高さ (m)
網代口 No. 1	140	29
網代口 No. 2	322	74
宇佐美口 No. 3	471	71
同 No. 4	260	38

隧道工事開始に先だつて次の 4 箇所にて地質調査の爲のボーリングを施行した。

ボーリングの結果 No. 1 は地表より約 23m 以下は青白色の粘土であり、No. 2 は安山岩の変質したものであることがわかつた。No. 3 及 No. 4 は表土層を過ぎてからは大体に於て脈状に青白い粘土を挟んだ堅緻な安山岩であると判定された。

以上調査の結果から網代口 250m 間は大体青白色粘土層であり、それから宇佐美口に向ひ順次変質せざる安山岩に移移するものと想定されたのである。

然るに網代口を實際掘鑿した結果は坑口約 20m 間は集塊岩であつたが、其の他は凡て変質安山岩(プロピライト)或は温泉余土と稱する青白色粘土であり、地質不良の結果掘鑿は非常な困難に遭遇したのである。

又宇佐美口も坑口は礫岩であつたが其の後堅硬なる安山岩を豫期したる所、殆んど風化して居り(プロピライト)又は幾分堅い温泉余土地帯が廣範圍に發達してゐた。而して 653m には不良の大断層あり、坑奥は断層接続し断層破碎帯の發達せる地質となつた。

プロピライト プロピライトは安山岩の変質したものであつて輝石類の綠泥化してゐるものである。本隧道のものは目多くして崩れ易く之を坑外に置くときは時日の経過に伴ひ軟弱となり手で容易に割れる程脆弱となり段々崩れて原形を失つて來るのである。

温泉余土 温泉余土は火山地帯に發達するもので集塊岩及び安山岩が後期火山活動の爲地下より上騰する熱蒸水の作用を受けたものであつて、岩石の組織の破壊、礦物成分の分解又は置換の行はれたものである。其の爲全く舊の安山岩の状態を変化し灰綠質の軟質に変質して居り、時として全く粘土と化し鱗片様の滑肌を生成してゐることも多

図-2 網代口 850m 附近を土圧強大なるためセントル彎曲す

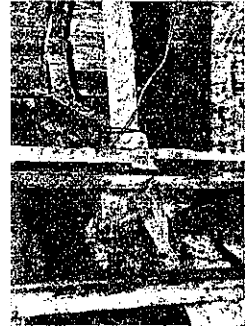


図-3 宮拱コンクリート脊部に入れる木片



い。かゝる物に對して與へられた名稱で、丹那隧道並に泉越隧道に於ても之に遭遇して惱んだのである。

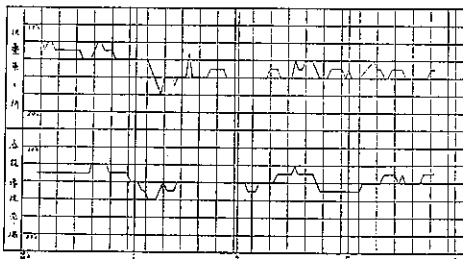
本隧道に遭遇した温泉余土の特質は土圧の強大なることである。

温泉余土の土圧 温泉余土は掘鑿した當初は相當硬い岩石様のももあるが、空氣に觸れると直ちに風化膨脹して強大なる土圧を惹起して支保構は順次破損せら底設導坑では其れを防ぐ爲にコンクリート塊で厚30cmに巻いた事があるが、それとも上部の切換進行に連れ偏圧の爲遂に破壊するに至つた。此の土圧を測定する爲特に設計した地圧測定器をコンクリート覆工中に挿入し土圧を測定したる處 7~10 kg/cm² 土圧が現はれた (圖-1 参照)。

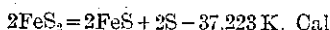
隧道の疊築は現在場所詰 コンクリートとなし最大70cm 巻としてゐる。穹拱部は 1:2:4 として側壁は 1:3:6 としてゐる。前記の通り温泉余土の膨脹力は絶大なものである故かゝる場所には、コンクリート脊部に木片を填充し之にクツシヨンの如き働きをなさしめコンクリートの硬化が終る迄は荷のかゝらぬ様な設計となつてゐる (圖-2 参照)。

3. 坑内温度、湧水 此の隧道の一つの特徴は坑内が非常に高温であることである。土圧も掘鑿後の時日の経過と共に強大となつて來るが、坑内気温も掘鑿後時日を経過した程暑くなる。又換氣の悪い處程熱が蓄積せられ気温が高くなる。従つて作業場としては、底設導坑の終端が比較的涼しく、頂設導坑、穹拱コンクリート作業場が最も暑い。土捨場に捨てられた礫は仲々高温を有し、2m 位下がると、50°C 以上のことが珍らしくない。

圖-4. 網代口坑内温度表



かゝる高温の原因は何に依るか、現在プロピライト及温泉余土中に含まれてる黄鉄鐵の酸化現象の結果に依るものとされてゐる。之れを化学的に説明すれば次式の通りとなる。



即ち硫化第一鉄が坑内の高温と濕氣を受けて分解して硫化第二鉄と硫黄となり硫化第二鉄は容易に酸化されて硫酸鉄となる。此の際非常な發熱作用をなして、その附近の温度は甚だしく上昇するのである。

昨年8月頃迄は最高温度は32°C程度であつたが、8月頃より急激に上昇し35~36°Cに達することが屢々あり、遂に10年9月頃より氷塊を坑内に搬入して冷却に努めた。爾來大体1日約800貫の氷を使用してゐる。

又坑内の換氣は温度の降下にも非常に役立つので、換氣機は毎分5000呎³、36HPの容量のものを約400m毎に据付けて常に吸出しの方向に運轉してゐる。

尙網代口の空氣圧搾機は最初100HP2臺が据付けてあつたが、換氣の目的にも一部使用してゐるので、現在5臺に増設した。

湧水 宇佐美隧道の湧水はたいしたものではない。現在網代口が1.5個宇佐美口が0.4個程度である。網代口700m附近は相當纏つた湧水があり此の時の3個が最大であつた。唯此處に困ることは硫化鐵の多き個所の湧水は酸性を有することであつて、酸性の濃度の高きものは鉄材並にコンクリートが腐蝕を受けることである。然し乍ら現在被害を被つてゐるのは網代口240-570mであつて、他は特に悪質のものではない。湧水の分析表は次の通りである。

成分	隧道内鉄條を腐蝕する水	隧道内の水
反応	酸性	弱アルカリ性
固形分	554.20	24.20
生石灰	30.38	6.27
マグネシア	2.34	0.53
無水硫酸	322.15	7.62

地山の温度を測定したる處大体24°Cであつて、湧水温度は24°C或は25°Cである。

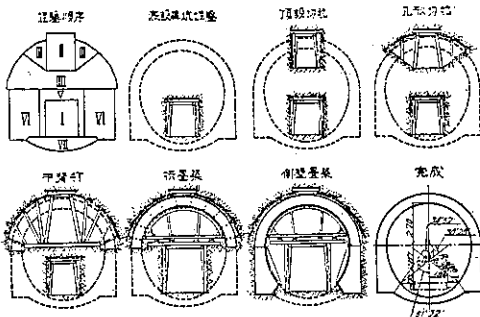
4. 北口工事の状況 北口1km820m間は伊東線第

圖-5. 換氣管(宇佐美口)



三工區の一部として株式会社間組の請負ふ處となり、昭和10年9月9日竣功の豫定で昭和8年1月12日導坑の掘進に着手した。掘進の結果は前述の通り地質が餘りにも豫想に反して居つたため、全く工程に蹉跌を來し強大な土圧のため覆工は其の型状を変更するの止むなきに至り、巻厚も増大され施工の順序も逆巻とし穹拱を先きに施工して安全を期して進行を計つた。然し行けども行けども温泉余土の土質は依然として変らず昭和9年3月底設導坑が600mまで進行した時前方に145mの試錐を施し地質を調査した結果は矢張り温泉余土である事が判明した。尙この試錐孔よりは毎秒約1.2個の湧水があつて場所によつては相當の湧水があつて今後益々工事の困難な事を暗示されたのであつた。

図-6. 掘鑿標準圖



然し工事は1日も休む事なく支保工を堅固にし巻厚を増大して土圧に對抗し乍ら難工ではあつたが工事は継続して居つたのである。かくして前途の困難全く豫測し難い状態にあるので、昭和9年11月

15日坑門起點700m以奥を解約し省直營を以つて施工する事にした。

其の後土質は依然として温泉余土であり、土圧は益々強く工事の進行と共に氣温の上昇も亦甚しく作業は一層の困難を續けてゐるが湧水は少く底設導坑は毎日20m程度

図-7. 網代口隧道断面圖

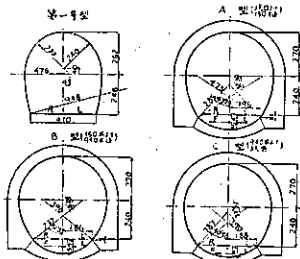
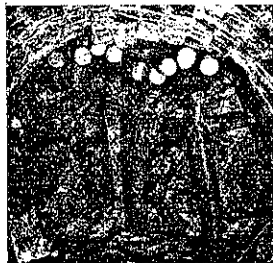


図-8. 宇佐美口653m附近断層個所地質不良にして掘進不能に陥る



の掘進を續けて居る。

5. 南口工事の状況 南口1km100m間は伊東線第四工區の一部として中央土木株式会社の請負として昭和8年10月3日導坑の掘鑿に着手し昭和10年9月19日竣工の契約であつた。

工事着手後地質は豫想と反し不良なる關係上巻厚を増大した。従つて掘鑿断面の増加等にて工事數量に変更を來し多少の蹉跌はあつたが比較的順調な工程を續け昭和9年10月には着手後1箇年にして導坑の掘進640mに達した。然るに支保工を吟味し慎重に掘鑿を續けたが653m附近にて断層に遭遇し僅少乍ら湧水を伴ひ強大なる土圧のため一部崩壊するの止むなきに至つた(図-8参照)。

導坑掘進方策確立のため前方の地質調査を必要とし、昭和10年1月より3月に亘り130mの試錐を施工した處數條の断層介在し其の奥も極めて少部分に良好

図-9. 宇佐美口800m附近坑内状況

(昭和11年5月1日現在)



地質の介在するのみで大部分は温泉余土様の土質であつて悪質のものに接続する事が判つた。恐らくこの地質は北口まで連続するものと認める事が容易に出来るのであるが、湧水も僅少であつたので導坑掘進に嚴重なる警戒を加へ直ちに覆工を施し慎重施工したならば断層も突破出来るものとの見込で昭和10年4月22日底設導坑の掘進に再着手し前記の崩壊せる坑道を縫ひ返し直ちにコンクリートの覆工を施しつゝ工を進めた。處が10年6月14日土圧愈々甚しく湧水は混濁し土砂を流出する等遂に坑道を閉塞するの止むなきに至つた。斯る状態地質も北口と同様となり今後の施工方針に就き北口と同一事由の許に640m以奥を解約し省直營を以て臨機施工する事とし昭和10年7月15日契約を解除した。其の後先進導坑は再び底設導坑を強襲する事は徒らに地質の弛緩を來す虞あるを顧慮し断層帯を迂迴掘進する策をとり630mより西に迂迴本線と18mの間隔を距て掘進する事とし8月25日之が工事に着手し断層不良地帯は直ちに覆工を施しつゝ先づ第一断層を突破して所定の目的を達し尙數條の断層を越え12月9日765mに達して掘進を休止し前方の地質を試錐することゝした。試錐は152mの進行を見迂迴坑奥端より20m距て、約50mに亘り悪地質

よりなる断層帯の存在することを知つた。一方底設導坑はこの迂迴坑 690 m 附近より分岐底設導坑に連絡し目下奥方に向け掘進中であるが既に不良地帯に這入つたが断層地帯意外に良好にして突破することが出来順調に坑奥に向け掘進してゐる。

試錐の際断層帯を抜けたとき湧水 1/3 個あり水圧 125 封度あつた。

6. 特圧型セントル 穹拱部コンクリートは場所詰なる爲コンクリートの強度の出る迄セメントで荷を受けることになる綱代口 800 m 附近は土圧強大なる爲セントルの一部が曲り、遂にコンクリートに龜裂を生じたのである。依つて爾後の部分は柱を一部埋殺しにして施行したが、1 000 m 附近の地質不良なる個所には特に設計した特圧型セントルを用ひ現在満足すべき結果を得てゐる。特圧型セントル 1 組の重量約 0.9 t, 價格約 400 円である。

図-10. 宇佐美隧道特圧型拱架

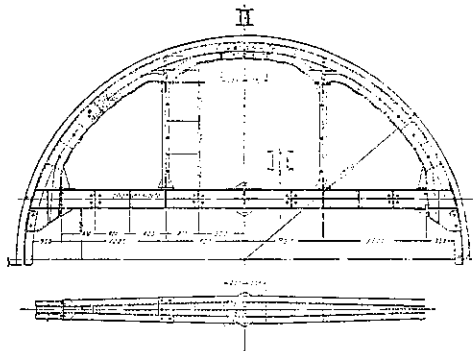
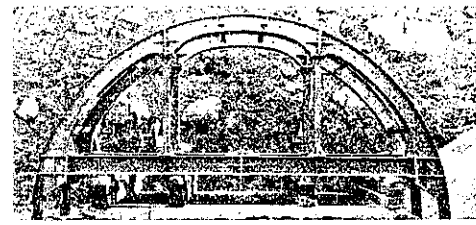


図-11. 特圧型セントル

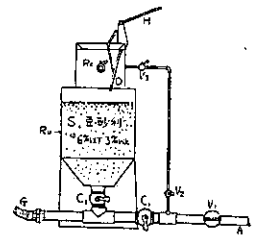


7. 豆砂利注入機 前述の如く綱代口は土圧強大なる爲特圧型セントルを使用して居るが壘築完成後も依然とし温泉余土の膨脹の爲土圧を増加しつゝある現狀である爲、若し偏圧を受けた場合は壘築が破壊されるので、壘築脊部に豆砂利を注入することとした。現在は龜裂の生じた個所の脊部に豆砂利を注入し、特に龜裂の大なる個所にはモルタル注入をも併せ行ふ計畫である。今後は土圧強大を豫想せらるゝ個所にセントル撤去後

図-12. 豆砂利注入機 (小型)



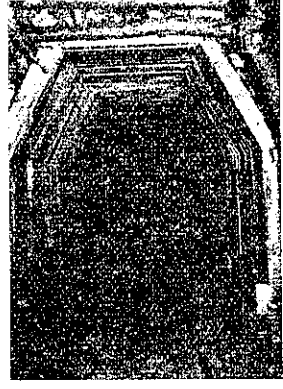
図-13. 豆砂利注入機 構造説明図



直ちに行ふ豫定である。豆砂利注入機は図示の様なもので豆砂利の大きさは 1/4 ~ 1/8 吋を使用し、圧搾氣圧力は 70~100 封度毎方吋である。

8. 合掌型支保構 宇佐美口に於ては 653 m 附近断層突破の爲迂迴坑掘進の際掘鑿後直ちにコンクリート塊による壘築を施行して無事目的を達したのであるが、其の後地質不良にして

図-14. 宇佐美迂迴坑合掌型 補強支保構



相當土圧がかかる様豫想される坑道には掘鑿後直ちにコンクリート塊の代りに 図-14 の様な合掌型支保構を施工して安全を期した。

合掌型支保構はコンクリート塊に依るものに比して短時間にて組立て得られ、工事費も安く而して相當の強度を得ることが出来るので有利としたのである。

9. 宇佐美隧道進行

(11年5月1日現在)

	北口(綱代側)	南口(宇佐美側)
着手年月日	8年1月12日	8年10月3日
底設導坑進行	1 355 m	933 m
穹拱コンクリート進行	1 100 m	640 m

正誤及び訂正表

朝鮮慶尙南道鼎岩橋架設工事報告

(第 21 卷第 9 號及び第 10 號所載)

頁	行	誤	正
口繪	工事寫眞説明中	第一トラス (42 m)	第一トラス (60 m)
1423	第 12 圖説明中	(午前)	(手前)
1425	下より 10 行目	沈下用載荷土壓, 水壓	沈下用載荷, 土壓, 水壓
1427	上より 11 "	高水作業	高水作用
"	上より 15 "	構造物を基礎	構造物の基礎
1432	第 19 圖中	12 m	24 m
"	"	48 m	36 m
1434	第 27 圖説明中	船船	解船
1439	14 行目	橋面に落	橋面の雨水が落
1440	第 38 圖説明中	15.0 m	1.5 m

重力堰堤の応力計算に就いて

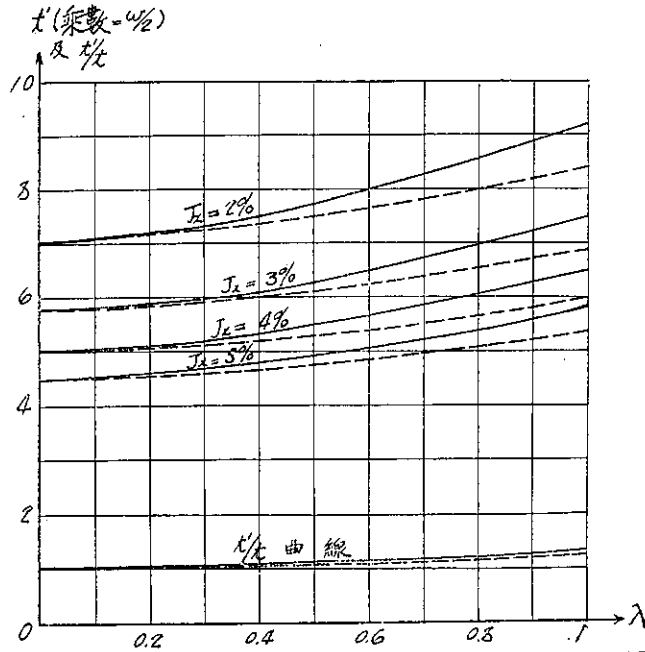
(第 22 卷第 3 號所載)

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
270	下 21	" Stres es	" Stresses	283	上 9	σ_{xy}'	τ_{xy}'
"	下 12	, Öste r	, Österr	"	下 7	$-5.493 h_0 \left(\dots + \frac{100y}{1000+y^2} \right) + \text{は}$	
"	下 10	und	und			$-5.4932 h_0 \left(\dots + \frac{100y}{10000+y^2} \right) + \text{の誤り}$	
"	下 2	Videnskap ^o	Videnskaps	284	下 15	集中荷形	集中荷重
271	上 17	τ_{θ}	$\tau_{r\theta}$	286	上 12	b_{10}	b_0'
"	下 11	r, θ 面	$r\theta$ 面	287	上 1	$\sigma_r = -\frac{2M \sin(2\theta - \delta)}{\dots}$	$\sigma_r = -\frac{2M \sin 2(\theta - \delta)}{\dots}$
272	上 5	ob, oc	Ob, Oc	"	上 3	$\tau_{r\theta} = \dots \{ \cos(2\theta - \delta) \dots \}$ は	
"	下 5	$\sigma_{r\theta}$	$\tau_{r\theta}$			$\tau_{r\theta} = \dots \{ \cos 2(\theta - \delta) \dots \}$ の誤り	
273	下 5	$+c_{n+2} \sin(n+2)\theta$	$+c_{n+2} \sin(n+2)\theta \}$	288	上 8	$e = -4.640 \text{ m}$	$e' = -4.640 \text{ m}$
"	下 1	b_n, d^n, a_{n+2}	b_n, d_n, a_{n+2}	"	上 10	$P = \sqrt{(1.559.940)^2 + \dots}$	$P = \sqrt{(1.559.940)^2 + \dots}$
274	上 11	面 ab 導線	面 ab, 導線	"	上 11	$= 1.562.523 \text{ t}$	$= 1.562.523 \text{ t}$
"	上 16	鉛直面 ac,	鉛直面 ab,	"	上 15	$\omega = 10^\circ 19'$	$w = 10^\circ 19'$
"	図-2 (c)	b	a	"	下 14	$c_1 = \dots = \frac{-0.0145 P}{\dots} = \dots$ は	
"	上 21 ((13)式)	$\frac{1}{2} \sin 2\theta \cdot \sigma_r - \dots$	$\frac{1}{2} \sin 2\theta \cdot \sigma_r - \dots$			$c_1 = \dots = \frac{-0.5145 P}{\dots} = \dots$ の誤り	
"	下 8	$(\tau_{r\theta})'_{\theta=\beta} = 0$	$(\tau_{r\theta})_{\theta=\beta} = 0$	"	下 6	$(184.652.6097 x^4 - 605112.1310 x^2 y - \dots)$ は	
277	上 2	$\dots + \cos(\alpha - \beta) - 1 \}$	$\dots + \cos 2(\alpha - \beta) - 1 \}$			$(184.652.6097 x^4 - 605.122.1310 x^2 y \dots)$ の誤り	
280	上 13	堤頂 o	堤頂 O	280	表-6, 第 1 行 3 列目	90	60
283	上 5	$\sigma_y = \left\{ \dots - 5.4392 h_0 \left(\dots \right) \text{は}$					
"		$\sigma_y = \left\{ \dots - 5.4932 h_0 \left(\dots \right) \text{の誤り}$					
"	上 7	σ'' ,	σ_y'' ,				

正誤及び訂正表

道路縦断勾配の路面排水に及ぼす効果に就て (第 22 卷第 1 號所載)

頁	行	誤	正
2	上より 22	$\tan \theta = \frac{J_x}{J_z}$	$\tan \theta = \frac{J_z}{J_x}$
"	" 23	水平流下流	水平流下距離
3	" 13	$dx \doteq ds$	$ds_n \doteq ds$
4	" 16	(3'') 式	$t' = \int_0^{t''} \frac{\sqrt{1+\lambda^2}}{\kappa} \sqrt{1+\lambda^2} \sqrt{\kappa} dx = \frac{\sqrt{(1+\lambda^2)^3}}{\sqrt{\kappa}} \frac{w}{2} \dots (3'')$
"	" 19	$\frac{t'}{t} = \sqrt[3]{1+\lambda^2}$	$\frac{t'}{t} = \sqrt[3]{(1+\lambda^2)^3}$
5	" 4	$\sqrt{1+\lambda^2}$	$\sqrt[3]{(1+\lambda^2)^3}$
"	" 7	41%	30%
6	" 2	$\dots + \log \left\{ \frac{\sqrt{\frac{64h^2}{w^4} x^2 + J_z^2 - \sqrt{J_z}}}{\sqrt{\frac{64h^2}{w^4} x^2 + J_z^2 + \sqrt{J_z}}} \right\}^{\frac{\sqrt{J_z}}{x}}$	$\dots + \log \left\{ \frac{\sqrt{\frac{64h^2}{w^4} x^2 + J_z^2 - \sqrt{J_z}}}{\sqrt{\frac{64h^2}{w^4} x^2 + J_z^2 + \sqrt{J_z}}} \right\}^{\frac{\sqrt{J_z}}{x}} \dots$
"	" 18	$\dots + \log \frac{\sqrt{a^4 x^4 + J_z^2 - ax}}{\sqrt{a^4 x^4 + J_z^2 + ax}} \dots$	$\dots + \log \frac{\sqrt{a^4 x^4 + J_z^2 - ax}}{\sqrt{a^4 x^4 + J_z^2 + ax}} \dots$
7	" 26	水道を付ける	水道を付けぬ
5	図-5		図-5 は下図と取換のこと



骨組測定の精度に就て [第 22 卷第 4 號所載]

頁	行	誤	正
451	上より 3	08	80
452	" 7	$E = \dots$	$E = \sqrt{\dots}$
452	" 13	(10)	(5)

會 告

講 演 並 に 映 畫 の 會

・下記の通り講演並に映畫の會を催しますから御誘ひ合せ多數の御來會を希望致します。

1. 日 時 昭和11年6月10日(水曜日)午後5時
2. 會 場 帝國鉄道協會(麴町區丸ノ内3ノ4)
3. 講演並に映畫

(イ) 講 演:

昭和10年利根川未曾有の大出水に就て 工学博士 金森誠之君

(ロ) 映 畫:

A. 群馬縣下大利根大風水害の實況 (全3卷) 群馬縣林務課編纂

註: 昭和10年9月25, 26日の兩日に亘る群馬縣下に於ける大洪水, 即ち土石流の暴威と慘虐の實況を危険を冒して撮影したものである。

B. 支 那 (全6卷) 日本大学調査課編纂

註: 支那の現状を映畫により一般に理解せしむるため日本大学調査課岩村講師に依り上海, 南京, 杭州, 天津, 北平, 龍門, 鄭州, 漢口, 揚子江沿岸等の風物社會其他を撮影し尙東洋工業會議の模様も1卷として取り入れた非常に豊富な内容を持つてゐる映畫である, 特に龍門附近の千古の石佛を活動寫眞に撮影したのは最初であつて多數の警官に守られ土匪來襲の危険を冒して撮つた貴重な資料である。

C. 東日國際ニュース (全2卷) 東京日日新聞社編纂

○映畫終了後午後7時より有志晚餐會を催します, 御繰合せ御出席を希望致します, 會費1円50錢(當日御持參のこと)。

○御來會の有無(講演映畫會並に晚餐會)を6月8日までに御申出で下さい。

土 木 学 會

會 告

図書室及び娛樂室御利用に就て

本會所有の図書及び雑誌は本會図書室に備付けてありますから、下記時間内御随意に御閲覽下さい。イタリー、ベルギー、ハンガリー、ノールエー、シヤム等の土木雑誌も備付けてあります。尙娛樂室には碁、將棋盤を備付けてありますから御利用を御願ひ致します。

自9月1日至12月31日 自午前9時至午後8時、 自7月21日 至8月31日 及土曜日自午前9時至午後4時、
自1月1日至7月20日

但し 日曜日及び祭日休。

図書御寄贈の御願ひ

本會は本會所有の図書雑誌を整理し、図書室を設備致しましたが、現在所有の図書は未だ充分とは云へませんから、會員の著書其の他図書雑誌は大小に拘らず學會宛御寄贈下さる様御願ひ致します。

徽章佩用に就て

本會の徽章は一般會員の方々に必ず佩用して頂く事に致してをります。講演會、見學會其の他事務所御利用には徽章佩用を必要としますから、未だ佩用せられない方は至急御申出で下さい。

1. 徽章の寸法 径 14mm
2. 品種 銀地金文字浮出し
3. 種類 詰襟服用と背廣服用の別あり
4. 實費 金 50 錢 (郵送の場合は外に書留郵便料 1 個に付金 13 錢を要す)



(價 物 九)

寄稿に関する注意

1. 用紙: 成るべく本會の原稿用紙を使用され度し。原稿用紙は御請求次第御送り致します。
 2. 頁數: 頁數は本會の原稿用紙 180 枚(本會誌 30 頁)以内とされ度し。若し前記頁數を超過する場合は登載をお断りすることがあります。
 3. 文体: 文體は文章的口語体とす。本文に重要な關係のない前置, 挨拶等は省く事。この方針に基き適當に字句の修整, 短縮を行ふことがありますから御了承あり度し。
 4. 書体: 楷書とし, 假名は平假名, 數字は算用數字, ローマ字は日本式ローマ字を使用され度し。歐字は特に明瞭に認められ度し。例へば n と u , u と v , r と v , a と α , r と γ , d と δ , その他 C と c , K と k , O と o 等頭字と小字とを判然たらしむる事。
 5. 數字名數: 數字は 3 桁毎に間隔を多ける事名數は次の如く書き括弧内の如く書くを避けること。例へば
35 錢 (三十五錢), 13.56 円 (十三円五十六錢), 1~4 時間 (一時間乃至四時間),
88 326 t (八萬八千三百二十六噸), 1936 年 1 月 1 日 (千九百三十五年一月一日),
m (米), m^3 (立方米), kg (瓩), 83.4 尺 (八丈三尺四寸)
 6. 用語: 応用力学及コンクリート用語は工學會決定用語を使用され度し(応用力学用語は本誌第 19 卷第 5 號, コンクリート用語は第 20 卷第 6 號會告参照)。
コンクリートは片假名で記し漢字を用ひざること。
 7. 図表: (1) 図表は図-1, 表-1 等と書き図表題を記すこと。
(2) 複雑なる表の如きは成るべくグラフにて示す事。
(3) 図面はその儘縮寫し得る様にトレーシング・ペーパー, オイル・ペーパー, トレーシング・クロス等とすること。
(4) 図表は凡て墨色を用ひインキ類或は採色を施さざる事。
(5) 方眼紙は青野のものを用ひ(黄色, 赤色の野は使用せざる事)縦横線を必要とする部分には豫め墨線にて之を描き置くこと。
(6) 図表の文字, 數字は特に大きく書かれ度し(縮寫の標準は 1/2~1/5 程度を以て縮寫後の文字の大きさを約 2mm 程度となる様され度し)。
(7) 図表類は製版の都合上かなり汚損するものと豫め御含み下され度し。
 8. 寫眞: 寫眞は特に明瞭なるものを送られ度し。
 9. 其他: (1) 論說報告は邦文に限る。
(2) 論說報告には必ず冒頭に英文表題及び邦文要旨並に著者の職名及び勤務所名を添附され度し。
- 附記: (1) 論說報告, 彙報, 抄録及び工事寫眞にして掲載せる分には薄謝を呈します。
(2) 講演, 論說報告の各欄に掲載の分には抜刷 20 部を寄稿者に贈呈致します。尙 20 部以上御希望の向には豫め御通知ある場合に限り實費にて御要求に応じます。

會員転居転勤の場合の注意

會員の御転居又は御転勤の場合は即時明細に御通知下され度し。

會費納付に付き注意

會 費	會員種格	會費年額	第 1 期分 (1 月～6 月)	第 2 期分 (7 月～12 月)
	會 員	金 12 円	金 6 円	金 6 円
	准 員	金 9 円	金 4.50 円	金 4.50 円
	学生員	金 6 円	金 3 円	金 3 円

新入會者は月割計算とす。

納 期 第 1 期分：3 月 第 2 期分：9 月

納付方法 集金郵便を差向けます（旅行等にて御不在の場合も拂込に支障なき様御配慮下さい）。

振替郵便御利用の場合は振替口座東京 16828 番へ願ひます。

朝鮮満洲の一部等振替貯金を取扱はざる地に居住せらるゝ會員は納期の翌月末迄爲替その他の方法に依り御送金相成たし。

會費一時納付の御豫定の場合は豫め御通知下されたし。

未納の場合 集金郵便に對し故なく支拂を拒絶し又はその他の方法により御送金なき場合は會費滞納者として遺憾ながら定款第 2 章第 14 條第 1 項に依り會誌の配布を停止せられます。

會誌未着の場合の注意

會誌は毎月 25 日に発行し漏なく配布致しますから、未着の場合には一応本會に御照會下さい。

発行後數ヶ月経過しての照會は時に殘部皆無となり配布不可能の場合があります。

既刊會誌殘部内譯

(* は残部有るものを示す)

巻	號	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	金額(1部)
5		*	*	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(円) 1.00
6		—	—	—	—	—	*	—	—	—	—	—	—	1.00
7		—	*	*	*	—	—	—	—	—	—	—	—	1.50
8		*	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.00
9		*	*	*	—	*	*	—	—	—	—	—	—	2.00
10		—	*	*	*	*	*	—	—	—	—	—	—	2.00
11		—	*	*	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.00
12		—	*	*	—	*	*	—	—	—	—	—	—	2.00
13		—	*	*	—	—	*	—	—	—	—	—	—	2.00
14		*	*	*	*	*	*	—	—	—	—	—	—	2.00
15		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1.00
16		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1.00
17		*	*	*	*	*	*	*	*	—	—	*	*	1.00
18		—	—	*	*	*	*	*	*	*	*	*	—	1.00
19		*	*	*	—	*	*	*	*	*	*	*	*	1.00
20		*	*	*	*	—	*	*	—	—	—	—	—	1.00
21		—	—	*	*	*	—	—	*	*	*	*	*	1.00
22		*	*	*	*	—	—	—	*	*	*	*	*	1.60

第 20 巻第 12 號 (創立 20 周年記念號)	1.50
第 21 巻第 7 號 (會誌索引付)	1.30
東京市内外交通に関する調査書	3.00
震害調査報告書(1, 2, 3)	18.00
応用力学聯合大會講演集	1.00
鉄筋コンクリート標準示方書	0.50
同上 解説	1.00
土木工学論文抄録	3.50
土木学会誌索引(第 1 巻第 1 號—第 20 巻第 12 號)	0.50

上記残部會誌御希望の場合は所要金額を振替口座東京 16828 番に拂込用紙通信欄にその旨記入請求せられたし。

廣 告 料

普通廣告	1 回 1 頁	35 円	1 回半頁	20 円
指定廣告	{裏表紙 3 面對 向及廣告初頁}		1 回 1 頁	40 円
			1 回 1 頁	70 円
		裏表紙 3 面 色アート	1 回 1 頁	60 円

- 指定廣告は凡て 1 箇年継続申込のものに限り取扱ふものとす
- 會員自身の廣告に對しては總て上記料金の割引とす
- 同一廣告の連続掲載申込に對しては 1 年 4 回以上 1 割引とす
- 廣告に寫眞版又は木版等を挿入する場合は之に要する實費を別に申受くるものとす

DOBOKU-GAKKAI-SI.

(JOURNAL OF THE CIVIL ENGINEERING SOCIETY.)

VOL. XXII, NO. 5, MAY, 1936.

CONTENTS.

	Page
Proceedings of the Society.	33
Presidential Address.	
Recent Features of the Civil Engineering Works in Japan.	
<i>By Hidezi Inoue, C. E., President.</i>	507
Papers.	
The Effect of Age of Phenolite on the Coefficient of Photo-elastic Extinction.	
<i>By Juitiro Kuno, Dr. Eng., Member.</i>	511
On the Historical Sketch & the Reconstruction Work of Kintai-Kyo.	
<i>By Tadanori Ôno, C.E., Member.</i>	515
Discussions.	535
Notes on Matters of Interest. ..	537
Abstracts of Selected Articles. ..	553
Patent News.	581

OFFICE

No. 6, 3-TYÔME, MARUNOUTI, KÔZIMATI-KU, TÔKYÔ, JAPAN.